カルテの余白に

くらし 健康・医療

救える命ある限り

AMDA(アムダ)[上]

世界では悲惨な災害や紛争が、頻繁に起きている。岡山市に本部を置く国際医療NGO「AMDA(アムダ)」[D]に所属する医師や看護師は、すぐに過酷な現場まで飛んで、患者や被災者らに向き合っている。「救える命があれば、どこへでも」の合言葉が、彼らの行動をそして被災者を支えている。

菅波茂・AMDAグループ代表

惨状目の当たり

〈2010年1月、カリブ海の島国ハイチを大地震が襲い、31万6000人が犠牲になった。那覇市の病院に勤める医師渡久地宏文さん(64)は、直後に首都ポルトープランスへ入った〉

市街地では大半の建物が倒壊し、大統領府さえ崩れていました。がれきの中にはたくさんの遺体が埋まり、野焼きで火葬する煙が立ちのぼっていました。

〈首都の医療機関は壊滅に近い状態で、郊外約60キロ・メートルの病院で診察した〉

ベッドの数が足りず、患者は廊下などに並んで寝ていました。古い機材を少ししか備えておらず、検査抜きで手術せざるを得ません。がれきの下敷きになって手足の壊死や骨折した負傷者が目立ち、命を救うために切断する人もたくさんいました。

手足がまひして歩けなくなっていた20歳代の男性に、私が「若いからあきらめないで、リハビリすれば良くなる可能性はありますよ」と励ますと、彼は「遠い日本から来てくれるなんて……。私たちは孤独じゃない」と答えました。重いけがで、激しい痛みに耐えているのに、笑顔を見せてくれた人もいます。そんな人たちの力になりたいと心から思いました。

▲大地震直後のハイチで診察にあたる渡久地さん(左)=AMDA提供

〈地震の規模はマグニチュード(M)7級だが、死者数はM9・0だった東日本大震災の10倍を超えた〉

人口約1000万の小さな国で、30万以上の命が失われ、約370万人が被災しました。ハイチは世界で最も貧しい国の一つ、どの建物も粗末な構造でした。だから簡単に崩れたのだと思います。貧しさが被害を拡大させたことに、心が痛み、とてもつらかった。

〈支援には継続的に取り組んでいる。ハイチでは地震後にコレラが急速に広がった。1年近くたった同年12月、AMDAグループ代表の菅波茂医師(65)らが再び現地に入った。菅波さんは当時を振り返る〉

まだ全く復興しておらず、あちこち避難所の青いテントが立っていました。地震前にコレラは流行していなかったのですが、被災で衛生状態が悪化したのが原因です。浅い井戸を飲み水に使うため、汚水が混じり、発生が止まらないのです。

隔離して点滴を行い、回復を待ちます。しかし激しい下痢や脱水が続いて衰弱し、地震で助かった命を、病気で失う方もいました。悲惨な現場ですが、それば かりに目を奪われてはいけないと思います。状況を冷静に見て、何をすべきか判断するのが、プロフェッショナルだと思っています。

息長く復興支援

〈活動は診療や救助にとどまらない〉

壊死や負傷で手足を切断した被災者は、ただでさえ貧しいのに、職や収入を失いかねません。そこで機材を送り、義肢装具士2人を派遣して、工房を開いて義肢を提供しました。

AMDAが被災地や紛争地で行った緊急救援活動は54か国137件に上りますが、その後も必要に応じて復興支援を続けています。

〈海外の活動で参加者は危険にも向き合う〉

昨年10月のトルコ東部地震では、AMDAのメンバーが泊まろうとして断られたホテルが、その後の余震で倒壊しました。ベトナムでは乗り遅れたバスが発車後、がけから転落しました。04年に内戦の復興支援でスリランカの海岸近くに滞在した時、スマトラ島沖地震の大津波が襲来しましたが、高台にいて助かりました。

AMDAの活動で死者はいませんが、多くの参加者が間一髪の経験をしています。同地震で津波被害の惨状を目の当たりにして、「もう二度とやりたくない」とショックを受けたメンバーもいました。

〈なぜリスクを背負ってまで支援するのか〉

人の命を助け、救い、見放すなというのが、医師免許に与えられた使命です。医師免許を持っている限り、それに従って行動しなければならないと私は思います。(聞き手 阿部健)

D AMDA 1984年に「アジア医師連絡協議会」として設立。30か国の支部がある。災害や紛争の発生時には、事前に登録した約400人の医師や看護師らから要請に応じた人を派遣し、各支部からも合流して、多国籍チームで活動する。

「くらし健康・医療」は日曜日に掲載します